研修としての構成型エンカウンター・グループにおけるファシリテーションの検討
―エクササイズにのれないメンバーへの対応を中心に―

高橋紀子
(九州大学大学院　人間環境学府)

Ⅰ　問題と目的

近年、看護学生や養護教諭などを対象に研修の一環としてエンカウンター・グループ（以下、EG とする）が行われている。研修型は強制参加であるがゆえに、メンバーが遊ぼうとしたり、雑談したり、サブグループ化するなどの逸楽行動が起こりやすい（中田,1999）。またグループサイズが大規模な場合、ファシリテーター（以下、Fa.）は、彼らばかりに気を取られるわけにもいかず、また他メンバーに与える影響を考えると具体的な対応も必要となる。

そこで本研究では、宿泊型の研修として行った EG の事例から彼らへのファシリテーションについて検討する。

Ⅱ　グループ構成

メンバー：看護学校の１年生83名（男6、女77）。
年齢は18歳～37歳
ファシリテーター：筆者（20代女性）
日程：入学して１週間後の時期。2泊3日。

Ⅲ　事例の経過

エクササイズにのれない様子が顕著だった２、３名のメンバー（いずれも10代の女性）を中心に記述する。

#1（1日目、１０：００～１２：００）

途中ポケットに入れていたジュースを飲んでいたようで気づいた担任が注意。エクササイズ中目立ったことはなし。感想には「これを機会に友達を作りたい」と記述。

#2（1日目、１３：２０～１５：５０）

動きの伴うエクササイズには意欲的だが、話中心のエクササイズになると続かずだれる。Fa.をチラチラ見、目が合うと微笑む。研修に拒否的というより、どう話したらいいのかわからない印象を受ける。

#3（1日目、１９：００～２０：３０）

紙を媒介に話すエクササイズを導入。#2 より話はできるようだったが他メンバーの話は聞かずサブグループを作りがち。<聞くことも大事>と途中全体に向けて伝えるが効果は一時的。セッション後「体育館にいるのにスポーツができないのはつらい」と Fa.に訴える。Fa.は長時間のセッションを労う。「しゃあないかー。休み時間にバスケしよう」と本人なりに納得した様子をみせる。

#4（2日目、９：００～１２：００）

携帯メールをしたり他のグループを眺めたり。Fa.は携帯の使用は注意し止めさせる。聞く態度に関しては何度も言葉をかけるのが躊躇われ何も言わなかった。彼らの態度に同じグループのメンバーは当惑した表情を見せ、他メンバーへの影響が気にかかる。

#5（2日目、１３：２０～１６：５０）

小グループを再編成し、のれないメンバーを分散させる。新しいグループでは話そうとせず、友達と目が合うと嬉しそうに手を振り相手と大声で話す。感想には「時間が長く感じる、つらい」。

#6（2日目、１９：００～２０：３０）

スポーツ中心のセッション。もっぱら応援にまわりつつも表情明るい。その後話中心のエクササイズを提示すると「えー、またあ」。一人当たりの時間を短くすると、比較的輪の中にとけ込めた様子。

#7（3日目、９：００～１２：００）

小グループ対抗のゲームを提示し作戦を話し合わせると熱心に取り組む。スポットライト式では自由に話してしまい内容もテーマに沿うものではない。しかしくそれぞれのグループでできることを>と声をかけ、話をする時間に話をしていることを支持する。するとぐっとメンバー同士頭を寄せ凝集性を高める。感想には「あきっぽい自分が最後まで参加できたのはすごいと思う」と記述。

Ⅳ　考察

充分に関係のとれていない入学直後の時期に、大人数の中でのれない状態が続くことは今後の学校適応に影響を及ぼす恐れもある。本事例の“のれないメンバー”は対話を中心としたエクササイズにのることが難しかった。他大勢はエクササイズにのる中、Fa.は基本的に大多数の状況に合わせており、彼らに対しては①研修上好ましくない行動に対しては直接注意し、②参加していること自体を支持する関わりを続けた。その結果、EG 本来の目的を達成することは難しくとも、研修に参加した実感を持つことには成功した。なお構成型 EG の場合遊びの要素を含むエクササイズもある。時折ゲーム性の高いものや描画等の媒介のあるエクササイズを提示すると、彼らの逸楽行動はエクササイズの中での表現として表出された。少人数ののれないメンバーに対しては、他メンバーと共有できる表現方法や同じ場にいることを保証する介入が必要といえる。